

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K10463

研究課題名(和文)ハイリスク初妊婦とその夫のコペアレンティングを促す支援プログラムの実施と評価

研究課題名(英文)Implementation and evaluation of support programs to encourage co-parenting of high-risk first-time pregnant women and their husbands

研究代表者

松浦 志保(MATSUURA, SHIHO)

島根大学・学術研究院医学・看護学系・講師

研究者番号：60405123

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ハイリスク初妊婦とその夫の親準備性を高めるプログラムの実施と評価を目的に1組の対象に事例的に展開した。

その結果、ハイリスク初妊婦とその夫の親準備性にある親になるイメージ・自覚・意識の認知的側面には、妊娠の受け止め、胎児存在実感、養育環境の振り返りによる自己親イメージ作りといった初妊婦と夫で共有できるプログラムの提供が有用である可能性が示唆された。それにより、促進された妊婦側の胎児への愛着行動は、夫婦間コミュニケーションを促進させ、夫の胎児愛着の高まりや親になるイメージ・自覚・意識のさらなる高まりをもたらすことが考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

周産期にリスクを持つ妊産婦およびそれを取り巻く家族は、出産年齢の上昇、不妊治療後妊娠の増加、基礎疾患を持つ女性の妊娠の増加に伴い今後も増加することは必至である現状の中で、本研究の知見はリスクを持つことで生じる心理社会的な影響を受ける対象に副ったケアの構築につながる。

また、ハイリスク初妊婦とその夫がハイリスクな状況から長期入院を強いられた中でも、それに抑圧されることなく、ともに親になることを意識し、親になるイメージや児への愛着を高められるケアを構築することは、親への移行の難しさを緩和し、その後のコペアレンティング(夫婦協同育児)へのスムーズな移行を支える看護の質やケアの向上に貢献できる。

研究成果の概要(英文)：This study was developed in a case study for a set of subjects for the purpose of implementing and evaluating a program to improve the parental readiness of high-risk first-time pregnant women and their husbands.

Our results suggest the potential usefulness of providing a program that helps high-risk, first-time pregnant women and their husbands to share images of themselves as parents by reflecting on the acceptance of pregnancy, realization of the existence of the fetus, and child-rearing environment in fostering the cognitive aspects of parental readiness (i.e., image, awareness, and self-awareness of becoming a parent). This could further promote attachment behavior of pregnant women to their children, thereby improving communication between husband and wife, deepening the husbands' attachment to their children, and enhancing the image, awareness, and self-awareness of becoming a parent to a greater extent.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：ハイリスク初妊婦 ハイリスク初妊婦の夫 親準備性 プログラム ペアレンティング

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

わが国において、長期入院を要するハイリスクな状態が親への移行におよぼす影響について妊婦とその夫を対象にアプローチした研究は見当たらない。その背景には、対象がハイリスクな状態にあることによるデータ収集の難しさや、それに付随しデータの蓄積に時間を要することも理由として考えられる。その中で、研究者が現在までに長期入院を要する妊婦を対象に行ってきた研究では、正常経過とは異なる妊娠環境が受容できない場合、初産婦に胎児への思いが希薄な傾向が認められ(松浦ら, 2011)、さらに安静治療下にある妊婦は抑うつ傾向にあることが明らかとなった(松浦ら, 2012)。それらの結果は、妊婦が思い描いていたマタニティーライフとは全く異なる現実に対し、母親として子ども(胎児)に一日でも長くお腹の中に留まって欲しいという差し迫った思いが多くを占め、親になる意識やイメージ、自覚といった認知的側面に意識が向きにくい状況があるからではないかと推察された。加えて、早産となった場合には、母子分離状態の長期化による愛着形成の難しさなどから虐待のリスクが高まる可能性(中野, 2011)、低出生体重児を出産することが母親による虐待の発生要因である確率が比較的高い(周, 2019)ことが明らかにされ、ハイリスクな状態にある妊婦の入院しながらの妊娠継続は、出産がゴールとなり、続く育児への意欲低下や欠如につながる可能性が極めて高いこと(平野, 2005)が指摘されている。また、早産となった父親が児の出生から退院までにストレスと感ずる事柄は「予測がつかない出来事」「役割負担」「小さな未熟な子をもつ不安」「特殊な環境」であり、そのストレスは妻の入院時からずっと抱え続けていたこと(松本ら, 2009)、NICUに入院中の低出生体重児を持つ父親が受けるストレスとして「父としてのイメージがわからない」こと(松岡ら, 2012)などが報告されている。

これらの結果は、親となっていくうえで重要視されるこの移行期にハイリスクな状態に置かれ入院加療を余儀なくされることで、初妊婦とその夫の双方にネガティブな影響をおよぼす可能性を示唆させるものである。親になる前から夫婦の絆を深め、子どもを迎える心理的な準備をしておくことは、将来起こり得る問題を未然に防ぎ(野末, 2004)、子どもの誕生による変化を予測していた夫婦の方が、そうでない夫婦よりも子どもの誕生後の適応が良好である(Cowan et al., 1985)ことなどから、長期入院を要する初妊婦とその夫への支援は、わが国の治療指針や医療体制が海外とは異なること、妊娠を継続していく環境の特殊性や、初めて親になるという観点などから対象に沿った支援が提供されるべきであり、それを検討する意義は極めて高い。

### 2. 研究の目的

本研究は、長期入院を強いられるハイリスク初妊婦(以下初妊婦)とその夫(以下夫)が夫婦関係を基盤にコペアレンティングが促される支援プログラムの実施とその効果の評価である。

### 3. 研究の方法

(1)プログラム参加者：妊娠 22 週以降、妊娠 34 週未満で、研究協力の同意が得られ、妊娠を受容しており、妊婦と夫両者にとっての第 1 子を妊娠中で保健指導が未実施である 20 歳以上 40 歳以下であり、切迫早産、前期破水、頸管無力症、前置胎盤、妊娠高血圧症候群、胎児奇形を伴わない胎児発育不全、多胎妊娠、既往妊娠(妊娠 22 週未満)の異常、既往を伴う母体合併症のいずれかもしくは複数の母体側を要因とする診断名を主訴とし、医師から入院による治療を指示され、入院から 1 週間以上を経過しており、それ以降も継続する入院の必要性を医師から診断され、入院が継続している状態にある初妊婦とその夫とした。

(2)研究デザインおよび評価方法：参加者にプログラムを実施することによる事例的検討研究とした。プログラムの実施は、表 1 で示した内容で 1 回のみである。プログラム参加の影響と課題について検討するための評価は、5 つの尺度(夫婦間コミュニケーション尺度、胎児への愛着尺度、親になる意識尺度、親になる自覚尺度、親になるイメージ尺度)を用いた質問紙調査および半構成的面接などを用いて行い、評価時期はプログラム参加前、プログラム参加直後、プログラム参加 1 週間後、妊娠 37 週時とした。

表 1 長期入院を要するハイリスク初妊婦とその夫を対象とした親準備性を高めるプログラム

		(COVID-19対策ver)
※プログラム実施前	無記名自記式質問紙の実施	20分
	プログラム内容	時間
	・本日のプログラム 概要説明 ・妊婦が分かった時の気持ちや思いの対話 ・入院している現時点での親になることへの受けとめや思いについての対話 ・胎児存在実感の夫婦間共有(エコー画像の共有と胎児心音の共有) ・養育環境の振り返りとそれをもとに現在の自分が思い描く親像についての対話 ・free talk time(親になることに関連する内容も含む) ・現状において親になる気持ちを高める工夫に関する対話 ・現状において親になることへの不安や困りごとに関する対話 ・メッセージの記載(妊婦・夫、妊婦・夫・胎児)	60分程度
※プログラム参加直後	無記名自記式質問紙の実施	20分
※プログラム実施1週間後	無記名自記式質問紙の実施	20分
※プログラム実施1週間後頃	半構成的面接	30~40分
※プログラム実施後 妊娠37週時	無記名自記式質問紙の実施	20分

### 4. 研究成果

#### (1)親準備性を高めるプログラムの評価

尺度による客観的評価に質的データを補完した総合的評価

初妊婦と夫の夫婦間コミュニケーション尺度のプログラム参加への結果は、プログラム参加直後に初妊婦と夫のいずれも得点の上昇を示し、特にプログラム参加後からの夫の得点の高まりは夫婦間コミュニケーション量あるいは頻度の増加に影響され、その結果の影響を受けた初

妊婦の得点であると推察された。このことは、初妊婦の「夫との大切な子を授けられたことへの感謝の気持ちを改めて感じた」「第三者（ファシリテーター）を交えて夫婦で話すことで、いつもより真剣で深いところまで考えていることを共有できた」や、夫の「お互いの考え方を直に話すことがなかったので、改めて自分の思いだけでなく妻の思いも聴けて自覚が高まった」「妻の意見を聴くことができたので、子育てはお互い協力しながらやっていきたいと思うようになった」ことに裏付けられるようにプログラムによって夫婦間コミュニケーションが刺激され、対話が親になる認知的側面にポジティブな影響を与えたと考えられた。

胎児への愛着尺度の結果は、初妊婦と夫ともに参加直後から妊娠 37 週時まで高まり続け、その影響は夫に顕著であった。これもプログラム参加直後に得点の高まりが認められたことから、iPad を通した間接的視覚による胎児存在実感の夫婦間共有や胎児を軸とした対話の影響があったと推察された。プログラム参加後も COVID-19 の影響で面会禁止の状況は続いたが、その環境下にあっても胎児への愛着が高まり続けていたことは、プログラムの効用であるとも考えられた。また、親準備性の高まりを確認する指標の一つとして胎児愛着が妥当であることが示唆された。これは、参加後 1 週間時にハイリスク初妊婦が「具体的に声に出して言うことがあまりなかったけれど、このしゃべっているのも(胎児に)聞こえているのかなと思って意識したり、(今までの妊娠期間を)振り返って思い出したことも、もうちょっと話しかけてみたりとか、こういうことしようねって感じで」や「親(面会に来る実母)とかも共有して、一緒に話しかけたり、楽しみだねって言って」と語ったように、実母までも巻き込んで胎児へ積極的対話をするようになったことや、「話しかけながら、撫でて、撫でてって感じで、痛いのがって心配されるくらい結構触ってますね」というように、胎児に触れるなどの愛着行動の増加が実感されたことが裏付ける。

また夫も「エコーを見たのが大きくて、ライブ感っていうんですかね。生きている状態を見せていただいたのは、自分の中で親になるっていうところの実感は大きく湧いてきて、よい機会になりました」というように、胎児から感じ取る生徴候が親になる実感を湧きあがらせると同時に胎児への愛着を高めたと考えられ、その様相がプログラム参加前から参加直後の初妊婦より急激な高まりにつながったと推察された。さらに、「(妻が)入院してから全然見せなかったんですけど、(画像で)お腹を見せてくれるようになり、(児の)体重の報告や今日もこんなに元気だったと頻りに送ってくれることでこの 1 週間(胎児の)成長を感じられるようになり、僕もそれを見て安心して親になる実感は高まってきている」と語ったように、参加後の妻の行動の変化に伴い物理的距離がある中でも胎児を身近に感じるといった親になる実感の高まりが、夫の胎児への愛着の高まりに影響したことも示された。

親になる意識尺度の結果は、制約感において夫がプログラム参加直後から、初妊婦が参加 1 週間後に低減を認め、正期産期に向けて解消される様子があり、その様相は初妊婦に強かった。この制約感得点の先行文献による解釈は、低いほど親になることを否定的に捉えている(小野寺ら, 1998)あるいは、親になることに制約を受ける(佐々木ら, 2004)ことから、プログラム参加は親になることへの制約感からの払拭につながる可能性が示唆された。

生まれてくるこどもの心配・不安得点の推移は、夫がプログラム参加直後から低下し妊娠 37 週時に向けてやや上昇し、初妊婦はプログラム参加直後に得点が増したが、その後はプログラム参加前の状態に落ち着き、夫と同様に妊娠 37 週時に向けて上昇していた。初妊婦は、生まれてくるこどもの心配・不安因子の中の“こどもが病弱だったらどうしようかと不安である”、“生まれてくるこどもが五体満足か気がかりである”の下位尺度得点に変化が認められ、胎児を軸としたプログラム項目のいずれかのネガティブな影響を受けた可能性があった。また両者ともに妊娠 37 週時に得点が増した結果は、無事正期産に入り治療も終了したことに続いて生じる出産に向けられた不安によるものである可能性も考えられた。

親になる実感・心の準備における得点は、プログラム参加以降、初妊婦と夫とも時間の経過とともに緩やかに上昇していた。初妊婦の「振り返ると妊娠初期の頃よりもこどもに対する思いや準備が整った」や「こどもの存在が前よりも自分自身の中で大きくなったと感じた」こと「話しながら、自分自身のことよりもこどものことを案じ、優先する場面があると気付いた」ことや、夫の「お互いの(親になることへの)考え方を直に話すことがなかったので、改めて自分の思いだけでなく妻の思いも聴けて(親になる)自覚が高まった」こと「出産してからの役割分担(家事、育児)が明確になった」ことなどから、親になる実感・心の準備は親になる自覚や親になるイメージの高まりといった認知的側面の影響を受ける可能性が示された。

親になる喜びの得点は、初妊婦と夫ともにプログラム参加前から妊娠 37 週時まで一貫して高く、両者にとって親になることはこの上ない喜びであることが推察された。この因子は、親になる自信との相関項目であり、初妊婦とその夫の親になることへの喜びが強いという結果が親になる自信の高まりにつながったと考えられた。また、親なる自信の高まりは正常な妊娠経過でも起こる経時的な変化であるが、プログラム参加後から高まりが認められたことは、初妊婦と夫の対話と胎児存在実感共有を基調とした内容のポジティブな影響でもあることが示された。

親になる自覚尺度の得点は、初妊婦が夫よりも高い状態にあり、プログラム参加直後から妊娠 37 週時に向けて高まった。初妊婦と夫がプログラムに参加した前後の時期は、正期産期を目前に控えていることから妊娠経過に伴い親になる自覚は自然と高まるものであるとも考えられるが、親になる自覚のみが単独で高まっていくとは考えにくい。この初妊婦と夫の両者の変化が、プログラム参加直後から高まりとして認められたことや初妊婦と夫は物理的距離により面会が不可能な状態にあったことから、特に夫はプログラム参加の直接的影響あるいは初妊婦のプ

プログラム参加による何らかの変化に伴う間接的な影響があったことが推察された。しかし、親になる実感・心の準備における得点部分でも述べたようにプログラム参加直後に初妊婦は「話しながら、自分自身のことよりもこどものことを案じ、優先する場面があると気付いた」「夫との大切な子を授けられたことへの感謝の気持ちを改めて感じた」と自身を振り返ることで親である自分を自覚し、夫は「お互いの考え方を直に話すことがなかったので、改めて自分の思いだけでなく妻の思いも聴けて自覚が高まった」と親になることに向けて対話をし、考える時間を共有できた体験により親になる自覚が明確になったと考えられた。また、プログラム参加後 1 週間時以降に初妊婦と夫ともに高まりが認められたことは、直接的な影響というより間接的な影響であると推察された。初妊婦がプログラムによる対話を通して自身を振り返ったことや、夫も同様に妻との親になることをテーマとした対話とそれに付随する考える時間の共有体験は、初妊婦と夫それぞれの親になる自覚を明瞭にさせていた。このことから親になる自覚は、初妊婦と夫の持つ個別の自覚と共有されることによる自覚といったいくつかの層状的体験によっても高まる、あるいは認識されるものであることが示唆された。それは同時に親になる自覚は尺度のみでは測りきれないものであることを明示した。

親になるイメージ尺度の得点結果には、プログラム参加前の初妊婦と夫の格差が顕著であったこと、その後夫はプログラム参加直後に一気にイメージが高まり、妊娠 37 週時に向けその高まりは続いたこと、初妊婦のプログラム参加前より高かった親になるイメージはプログラム参加直後に一時的低下を見せ、その後夫と同様に妊娠 37 週時に向け高まるといった 3 つの特徴があった。初妊婦のプログラム参加直後の親になるイメージの低下は、その後の高まりを考えるとネガティブな影響がそこに存在した可能性があった。また、プログラム参加直後以降の初妊婦の得点の上昇および夫のプログラム参加直後からの得点の推移からは、プログラムの認知的側面への効用が示唆された。これは、初妊婦が「日常の中で夫や母などどのように子育てしていくか話していたが、改めて整理し振り返ることができた」と述べたように、プログラム参加前から夫婦間対話を行う中である程度イメージが高まっていたことを推察させた。また、夫がプログラム参加直後から妊娠 37 週時に向けて一気に高まる傾向にあったのは、「出産してからの役割分担（家事、育児）が明確になった」と述べたように、プログラム内での対話を通して自己親イメージが鮮明化した可能性から、親になるイメージの高まりに影響があったと考えられた。また、ローリスクな対象とは異なり妊娠継続期間が短縮される可能性が高い対象にとっては、意図的に親になるイメージを高める支援が必要であることが示された。さらに、初妊婦が「サポートしてくれる人がたくさんいることを改めて感じ、一人で抱え込み過ぎずに困ったら周りを巻き込んでやっていけそうだと感じた」とプログラム参加したことを自己親イメージの再確認の機会と捉えていながら、参加直後の得点が参加前より低下したことは、親になるイメージも親になる自覚と同様に尺度のみでは測定しきれないものであると考えられた。

#### 親準備性の高まりへの対話に依らないプログラムの評価

早期から胎児画像を見る機会をつくり、見る回数を重ねることは胎児への関心を高める(小林, 2002)ことなどを根拠に、親準備性の高まりを期待し、プログラム内で夫に妊婦のお腹を直に触れてもらうことによる胎動実感、超音波ドップラー装置を用いた胎児心拍聴取、胎児超音波画像を用いた触覚、聴覚、視覚による胎児存在実感の夫婦間共有を組み入れた。

このことは、COVID-19 感染対策で予定していた妊婦健康診査に帯同できなかった夫にとっては「エコーを見たのが大きくて、ライブ感っていうんですかね。生きている状態を見たのは、自分の中で親になるっていうところの実感が大きく湧いてきた。」と語ったように、iPad を通してではあったが親になる気持ちを触発する体験となっていたのは明らかであった。

また、研究者がハイリスク妊婦を研究対象者として長年かかわってきた経験から、入院が長期化してくる対象の母子手帳は比較的記載が少ない印象が否めなかった。このことから、初妊婦とその夫が親準備性を整えていく過程での気持ちや思いが記録として残り、後に母子手帳を開いた際に親としての自己を振り返るきっかけになると考え、プログラムの最後にメッセージ用紙を記載する支援を設けた。この方法は、自分から相手への手紙により素直な気持ちを書くことで自分の心の中の感情に気付き、自己理解と他者理解を得て自分も他者も受容していくというロールレタリングの効果(岡本, 2012)に基づいた支援であった。結果として示された内容は、親である自分が意識され、プログラムの最後に配置したことにより思い描いた自己親イメージが投影された形で胎児に向けて綴られているように推察された。また「一緒に住んでいると手紙を書くことはあまりないので、いい機会かなと思い素直な気持ち」で綴られていたことから、相互的な夫婦の関係性を築くことができるや、親になるイメージが豊かになり夫婦間共有できるといったねらいが達成される支援となることが考えられた。

#### 対象のプログラム参加による相乗効果

初妊婦は、プログラム参加後に「(プログラム内で)話してくれた内容を聴いて嬉しかった気持ち、赤ちゃんのことを考えてくれていて嬉しかった気持ち」を夫だけでなく実母にも伝えることで、「親に、(夫が)親としてどうなのかを伝えられたのは、(そのことが)入院して心配してくれる親を安心させてあげられていたら良かった」というように、プログラム参加により夫の親としての準備性の高まりを認識し、それを親に伝えることで家族の調和が図られていた。また、「親(実母)とかも共有して、(胎児に)一緒に話しかけたり、楽しみだねって言って」と初妊婦

の胎児への愛着の高まりは、夫のみならず親との関係性の構築も間接的に促進された。これは、プログラムが初妊婦と夫の 2 者間の親準備性を高めるだけにとどまらず、それを支える家族の機能を高めることへの一助となる可能性を示した。

また、研究者はプログラム内では胎児超音波により胎児存在実感を共有する場面以外はほとんどをファシリテーターの役割を担った。対象の「ファシリテーターの言葉に、自分達のこれまでを承認してもらった気がした」「第三者（ファシリテーター）を交えて夫婦で話すことで、いつもより真剣で深いところまで考えていることを共有できた」ことや、「親になることについて言葉で伝えたり、2人で真面目に話すことはないから、第三者（ファシリテーター）がいることは新鮮」「妻がどんな状況なのか、妻がどう思っているのか、こどもがどうなのかというの、妻からの情報しかなく、不透明な部分が多すぎたので、（ファシリテーターを挟んで）お話しさせてもらったので、その辺はちょっとなくなりました」という発言から、ねらいに沿った専門職者が行うファシリテーションが初妊婦と夫がどのような親になりたいかという自己親イメージを高め、親になる自覚を持つことにつながると考えられた。

## (2)親準備性を高めるプログラムの展開方法の妥当性

プログラム内容は、初妊婦と夫の対話を中心としながら、胎児超音波画像により胎児存在実感の共有場面およびメッセージ用紙への記載も組み込み独自の展開方法であった。参加者の妊娠週数は、プログラム参加時が妊娠 33 週台でありハイリスクな状態にあったが安定した妊娠継続ができていたことから【治療成果に左右される親になることへの不安】【早まる出産可能性への不安】などの『親になるうえで治療しながら妊娠継続することの副作用』や『親になることへの入院の副作用』の概念は対象から見出せなかった。また、参加者は入院から 1 週間以上が経過し今後入院の長期化が予測されたが、プログラム参加時点では長期入院の状態にはなかったことから『親となる負担感との共存』の概念を説明するカテゴリーが記述や語りに存在しなかった。

本プログラムの最終目標を評価するうえで掲げた 7 つのねらいについて初妊婦と夫は、妊娠が分かった時の気持ちや思いといった妊娠の受け止めを振り返りながら共有することで、自身の気持ちや行動に親としての変化が起きていることに気付いていた。初妊婦が、胎児存在実感の共有やメッセージの記載などを通して、夫の親としての意識、自覚、イメージといった認知的側面の高まりを実感したことや、夫との親になる気持ちに差がないと実感できた体験は、初妊婦の親としての意識、自覚、イメージを刺激し、胎児への愛着行動の促進につながっていた。さらに、初妊婦の胎児への愛着行動の増加は夫の胎児への愛着を高めると同時に、夫婦で子育てをするイメージの醸成と共有を導き、それに伴う夫婦間のコミュニケーションの増加は夫婦の周囲に存在する人との豊かな関係性をもたらしていた。

以上のことから、プログラム参加直後から妊娠 37 週時までの妊娠期における効果の評価ではあったが、ハイリスク初妊婦とその夫の親準備性を高める可能性を示唆するプログラムである。

## <引用文献>

- Cowan C.P., Cowan P.A., Heming G., et al.(1985) . Transitions to parenthood: his, hers, and theirs . Journal of Family Issues , 6(4) , 451-481 .
- 平野秀人(2005) . 早産その理解と管理 . メディカ出版 , 大阪 .
- 小林益江(2002) . 妻の妊娠期からの父親準備 - 胎児画像・胎動とジェンダー特性から - . 母性衛生 , 43(2) , 274-282 .
- 松浦志保 , 吉沢豊予子(2011) . Bed Rest 治療を余儀なくされた妊婦の心理的状況の記述 : 入院から入院後 2-3 週間まで . 母性衛生 , 51(4) , 647-654 .
- 松浦志保 , 清水嘉子 , 赤羽洋子 , 他 2 名(2012) . Bed Rest 治療中のハイリスク妊婦に行うストレッチングの自律神経活動および気分への影響 . 長野県看護大学紀要 , 14 , 1 - 11 .
- 松岡麻衣 , 野田美恵 , 小山絵里(2012) . NICU に入院中の低出生体重児を持つ父親のストレスとコーピング . 長野赤十字病院医誌 , 26 , 49 - 52 .
- 松本智津 , 尾原喜美子(2009) . 早産児をもつ父親が感じるストレス - 妻の入院から児の退院まで - . インターナショナル Nursing Care Research , 8(3) , 123 - 131 .
- 中野博子(2011) . 小さいのちを育む - NICU より . 心身健康科学 , 7(2) , 64 - 69 .
- 野末武義(2004) . 子育て問題への家族療法的アプローチ ~ どう理解し , 援助し , 予防するか . 日本家族心理学会 , 子育て臨床の理論と実際(第 2 版) . 金子書房 , 17 - 33 , 東京 .
- 岡本茂樹(2012) . ロールレタリング 手紙を書く心理療法の理論と実践 . 金子書房 , 東京 .
- 小野寺敦子 , 青木紀久代 , 小山真弓(1998) . 父親になる意識の形成過程 . 発達心理学 , 9(2) , 121 - 130 .
- 佐々木くみ子 , 植田彩 , 鈴木康江 , 他 2 名(2004) . 親となる意識の構造とその影響要因に関する調査研究 . 米子医学雑誌 , 55 , 142 - 150 .
- 周燕飛(2019) . 母親による児童虐待の発生要因に関する実証分析 , 医療と社会 , 29(1) , 119 - 134 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------